

東アジア諸社会に越境市民社会は形成されうるのか？

岡田浩樹（神戸大学）

本報告は、東アジア諸社会、特に韓国と日本の事例を取り上げ、本分科会のテーマである「越境市民社会」が成立するのか、成立するとすればどのような context、要因において可能なのかを検討する。別の言葉で言えば、東アジア諸社会において「越境的市民社会」が成立しえない（あるいは成立が困難）であるとすれば、それはどのような context、要因によるものかを問うことである。

これについて、本発表では韓国社会における「朝鮮族」、日本社会における「ニッケイ」（主に日系ブラジル人）を取り上げる。この二つの「エスニックグループ」は、国境を越え移動するとともに、組織的な形で具現化された広範囲な越境ネットワークを持っていく。「民族」（朝鮮系、日系）という帰属意識を持つことからも、一見したところ、「市民団体」（civil society organization）の用件を備え、東アジアにおける「越境的市民社会」の事例として取り上げることが適切なよう思える。「越境的市民社会」の観点からは、この他に華僑、日本社会における在日コリアンも検討することは可能であるものの、本報告は意図的に、この二つの「エスニックグループ」に注目する。これにより、東アジア諸社会のみならず非西洋社会における越境的市民社会をめぐる一般的な考察へなにがしかの理論的貢献を試みたい。そこで、本発表ではあえて、「越境市民社会」の存在を前提とせず、二つのエスニックグループを具体的個別事例として取り扱うことはしない。そもそも、この二つのエスニックグループは「越境市民社会」を形成しているのか、という問い合わせを出発点とすることで、本分科会の重要な論点、「市民社会の越境的動態」を検討するためである。

本発表がいう「市民社会」とは、分科会の代表者である上杉の定義にまずは従う。すなわち、上杉によれば、①国家と個人の間に存し、②社交的関係の中で、（当事者が定義するところの）公共心や道徳性、気遣い、互酬性、礼儀、宗教性、連帯感などの社会的価値が、③利益の追求を主たる目的とする活動は含まれない領域であるという。

この「市民社会」は、近代国民国家に対抗する、あるいは近代国民国家の支配の及ばない領域として、種に近代西洋社会において形成された概念である。しかし、この概念は市民権（Citizenship）と同じく、ひとたび非西洋社会に適用された場合、「途端に議論は屈折してくる」（梅屋・波佐間 2018:166）。すなわち、西洋の知的支配の装置として作用し、「個人」が主体

的に形成する領域という、広い意味での近代イデオロギーの枠組みに人々を押し込めてしまう問題がある。その一方で、人類学者は、近代国民国家の統治とは別個に形成された領域が存在するという見方に誘惑される。皮肉な言い方をすれば、かつて「国家なき、平等社会」を「未開社会」に見いだしたのと同じく、近代国家社会内部に近代国家に統治されない「市民社会」を見いだそうとしている批判をうる。

加えて「市民社会」を、「越境」という現象と関連させて検討する場合には別の問題もたち現れる。本分科会の他の発表もそうであるように、「越境的市民社会」の事例として対象化されるのは、移民、移住者、移住労働者などの、いわゆるエスニック・マイノリティである。Barth の古典的な議論をあげるまでもなく、民族の認知的境界は集合的な他者、特にホスト社会におけるマジョリティとの差異の認識と相互行為の過程の中で構築される。ゆえにエスニック・マイノリティ研究は同時にホスト社会のマジョリティ研究を必要とする。とするならば、「同化」「排除」「共生」あるいは「包摶」などの越境先のホスト社会の統合政策と、まったく無関係に「越境的市民社会」が形成されるのではない。もしあるとすれば、「越境的」ではなく、「間境市民社会」？であろう。このように「市民社会」を非西洋社会に適用する際には、ローカルな context に基づき、慎重な検討と概念操作を行う必要があるであろう。

このような観点から、韓国社会における「朝鮮族」、日本社会における「ニッケイ」は興味深い相似を示す。すなわち、ホスト社会を一つのエスニックグループ（韓国人、日本人）が 90%以上という圧倒的なマイノリティとして存在し、近代化（脱植民地化）の過程で、「単一民族国家」のナショナリズムが現在も根強く残っている。しかし近年、少子高齢化、労働人口の減少の中で「外国人労働者」を導入せざるを得なくなった時に、「同一民族」であることも一つのプル要因となって導入されたのが「朝鮮族」、「ニッケイ」である。この類似性に着目し、本発表では、東アジア諸社会における「越境市民社会」、「市民社会の越境的動態」を理解する上でのローカルな context、非西洋社会における「国家」「民族」という要因について検討したい。

（参照文献）

Nyamnjoh, Francis B. 2013 Fiction and reality of mobility in Africa, *Citizenship Studies*, 17:6-7, 653-680.

梅屋潔、波佐間逸博 2018 「序—東アフリカにおけるシチズンシップ研究に向けて」『文化人類学』83-2:166-191.

越境市民社会、朝鮮族、ニッケイ、一国一民族主義、間境市民社会